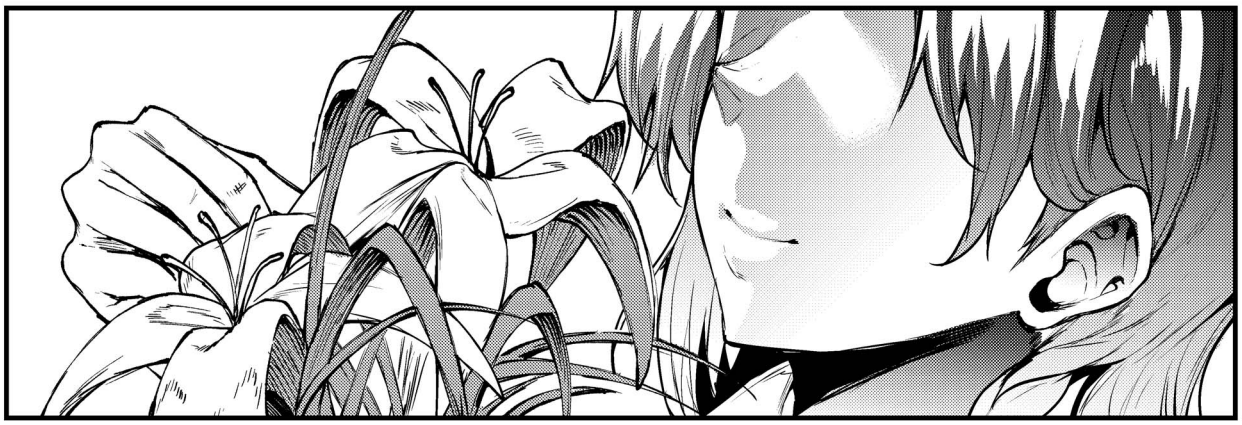
BANCA POPOLARE di NOVARA



おい
待てよ〜！
あはははは！
こっちだよ！

ぼふっ！
わぷっ！？

いたた…

ムチッ♥

ムチッ♥

ごめんなさい
大丈夫？

ダプッ

ゆさっ♥

…う…
うん…

デッカ…

すっ

怪我はない？
ハイこれ

…お花…？

キミもこのお花のように明るい顔をしないとね

ベリンダ
倉庫で母さんを
手伝ってくれないか

はいっ！

僕は1人の
花売りのお姉さんと
出会った

お姉さんの名前は
ベリンダ…って
言うんだ

いつも遊んでる
路地だけど…
こんなお花屋さんが
あるなんて
気が付かなかったな

お花…
すごく綺麗で…
良い匂いだ

僕は毎日
お姉さんを遠目に
眺めるように
なった
お姉さんも
お花に負けないくらい…
ううん
お花よりずっとずっと
キレイだよ！
そう
伝えたかった
ある日お姉さんは
籠いっぱいに
お花を詰めて
道行く人に
売って回っていた
でもそこで…
僕は見てしまった
あぁんあぁ
ガッ
ガッ
ガッ
あぁ…あぁ

お姉さんの
本当の素顔は
すごくエッチで…
見たこともない顔を
していた

街でお花を売る
お姉さん
だけどお客さんは
全員男の人だ

それも僕みたいな
子供じゃなく
仕事をしている
大人ばかりだ

陽が
落ち始める頃から
夜中まで

街行く男の人に
声をかけたり
酒場から出てきた人に
声を掛けたりしていた

お兄さん
お花どう？

…いくらだ？

…三千で
どう？

初めは意味が
わからなかった
お花が
三千ペリラ？

男の人からお金を
受け取るとお姉さんは
いつになく嬉しそうな
顔をして男の人に寄り添い
腕に手を回し
路地裏の奥へと
消えていった。

恐る恐る
覗いてみると
お姉さんは
その男の…

おちんちんを
ペロペロと
舐めていたんだ…

おっほ♥

んっ

んっ
んっ♥

れるっ
れる
れる

ぢゅぢゅ

ぢゅるるっ

ぢゅるるっ

ぢゅぽっ

おっほ♥
すげっ♥

なんだ…？
何をして
いるんだろう…？

ちゅぱっ
ちゅぱっ
ぐぷっ♥
ずちゅるっ♥
あ〜っ
すぢっ♥
じゅるるッ

お姉さんは
じゅぽじゅぽと
音を立てておちんちんを
美味しそうに
しゃぶっている

ぐぷぽぽッ♥
ぷぽッ♥
んふぅ♥
あっ♥
ぢゅるッ♥
ぢゅぱっ♥
ジュッ
ジュッ
ジュッ

そして男の人が苦しそうに
うめき声をあげると
おちんちんから何かが出て
それをお姉さんは
美味しそうに
喉を鳴らして飲み干した

ピゥ
ピクン

その時
僕のおちんちんも
キュッとした

ふー♥
ふー♥

次の日も
その次の日も
お姉さんは男の人に
お花を三千ペリラで
売っていた
んっ
じゅるる
日に何人もの
男の人の
おちんちんを
吸っている
そして
おちんちんから出た
白いおしっこを
美味しそうに
啜っている
ズリッ
ズリュ
ムワァァ
どろ…
ゲプゥ♥
んへあっ♥
あま〜っ
ズリュ
ズリッ
そんなに…
美味しいのかな…？

でもほとんどの男の人は
一万ペリラでおちんちんを
お姉さんの股に
ぶつけているんだ
あんっ♥すごっ
僕は何か
みちゃいけないものを
見ているようだったけど
おちんちんが大きくなって
堪らなかった
恐る恐るおちんちんを
ゴシゴシと
しごいてみたら
すごい気持ちが良かった
もっと♥もっとついてぇん♥
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ
パンッ!!

そうか
大人はみんな
これを
楽しんでいるんだ
お姉さんの顔を
思い浮かべながら
こすっていたら
おちんちんから
白くてドロドロ
したのが出た
おしっこじゃない…
これはお姉さんが美味しそうに
飲んでいたものだ！

僕は我慢が出来なくなった
僕もお姉さんと…
したい…！